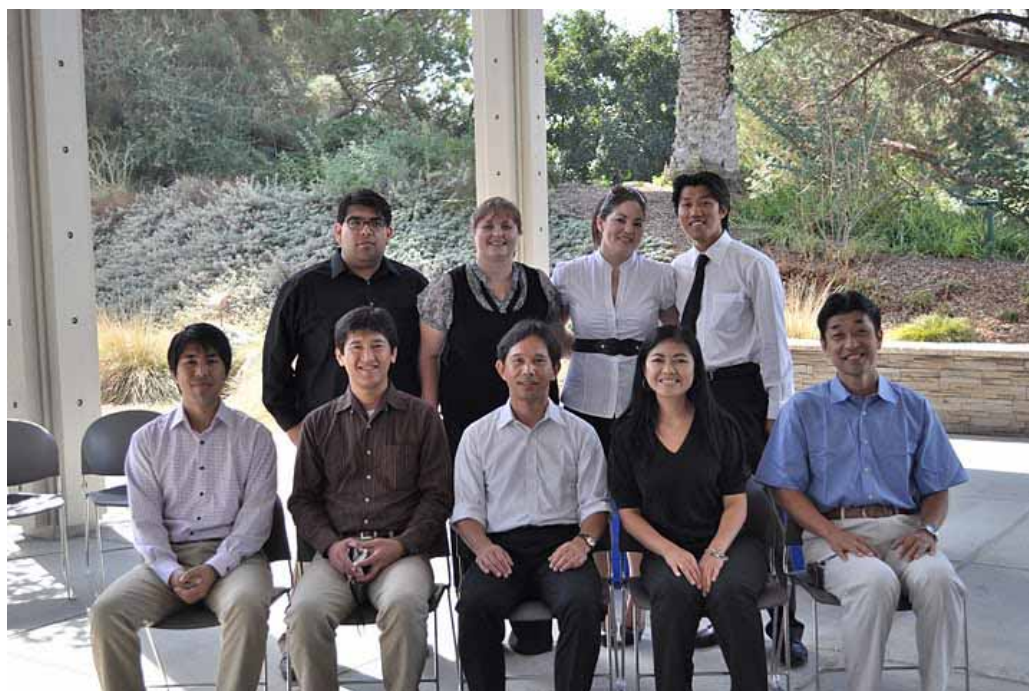


第4 回FD 研修報告

生物工学国際交流センター 木下 浩

カルフォルニア州立大学フルトン校 (California State University, Fullerton)

期間: 2010 年9 月20 日(月) ~ 10 月3 日(日)



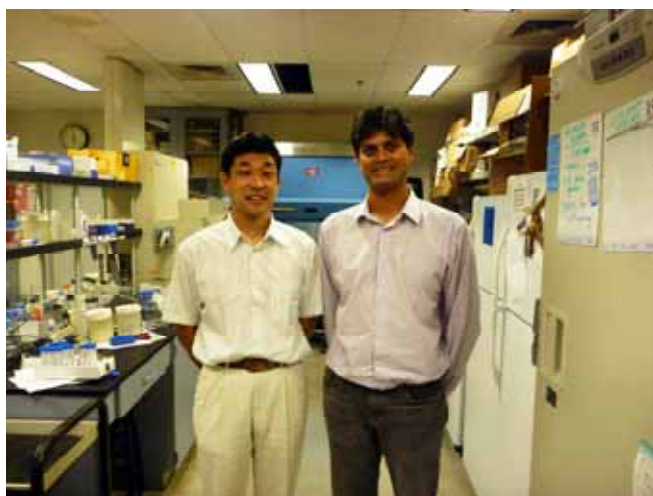
この度、第四回目のFD研修に参加する機会を得て、2週間におよぶCSUFでの英語による教育方法に関する研修を受けたのでここに報告する。

残暑の日本を脱しカリフォルニアの快適な気候にひたるはずが、フルトンでも記録的な暑さであり、日中は外に出るのもいやになるくらいであった。ホテルにチェックインした後、CSUFでのオリエンテーション、レセプションを受けて第一日目が終わった。時差ぼけによる眠気としばらく戦った後、眠りに落ちると2日目からは様々な講義が待っていた。

最初のBruceの授業で教員としての振る舞い方について意識付けされた後、Cindyによる英語によるプレゼンテーションの講義を受けた。最近では日本でもプレゼンに関するハウツー本も多くなり、私がそれらから学んだものと講義の内容はそれほど異ならなかったため、新しく得られたものは多かったわけではないが、自分が学び理解してきたものがアメリカのスタンダードと変わらなかったことは、安心感を与えるものであった。

3日目にCSUFにおける最初の授業としてメンターNilay Patelの講義を見学した。彼の授業はその後学ぶアクティブラーニング及びインターラクティブラーニングそのものであり、講義の間、学生に前の時間に教えたことなどを質問し、理解度を確認していた。その際、質問の返事が帰ってくるまでかなり待つ場合もあり、粘り強く接している印象を

受けた。研究室では学生の理解度を測るためにいろいろな事柄を説明させることもあるが、授業においてもそのようなやり方が有効であると感じた。ただ、米国の学生は皆、積極的なのかと思っていたが、それほどでもなく、やはりどこにでもあまり参加しない人はいるようであった。後で、そのことについてNilayに訪ねると、彼にとってもそれらの人たちを授業に取り込むのは難しいようであった。



3日目の午後にはVikkiによるScientific teaching のワークショップが始まった。とてもアクティブな先生で退屈することはなかったがそれでも100分を超える授業をただ聞くだけだと集中力は持たないと思われる。しかし、予定通りなのか、我々の様子を見てなのかは分からないが、疲れてきたところで様々なアクティビティを入れてくれるので気分が一新され授業に向かう気力が出てくる。今回の研修でなにより有益であったのは授業を受けている学生の気持ちがよく分かったことである。

Vikkiのワークショップ全般を通じて特に印象深かったのはアセスメントの重要性である。これまで授業中に質問を促すものの反応が返ってくることは少なく、理解度を測るのは、授業終了時のテスト、レポートに頼ることが多かった。しかし、学生の授業への参加を促し、内容への理解を高めさせるためには授業の合間に小まめにアセスメントを行うことが必要であることがよく分かった。アセスメントにはいろいろな方法があり、それらを駆使することによって、学生自らに自分の理解していることを認識させることも可能であり、それがさらなる学習への意欲にもつながると考えられる。

ワークショップ自体は学ぶことも多く非常に有益であったと感じているが、研修全般を通じて見学できた講義の種類が少なかったのは物足りなかった。研修に来る前は授業ではClickerを常に使っているような印象であったが、結局一度もClickerを活用している授業を見ないまま終わってしまった。日程を合わせるのは大変であろうが、ビデオでも良いのでもう少し、いろいろなスタイルの授業風景を見学したかった。

ワークショップ、プレゼン講義等で学んだことを元に、最後にNilayのクラスで講義を行ったが、このクラスは幹細胞の分化についての実験を主としており、私の専門である微生物とはかなり異なるバックグラウンドを有する学生が聴衆となった。メンターのNilayとは打ち合わせを重ねたが、どの程度まで突っ込んだ話をして良いものかつかみきれないまま授業を行うこととなってしまう、本番でも思わぬところで知識の食い違いも見られた。分野が異なる学生に講義をする場合は本番の授業を行う前に、少し「アセスメン

ト」を兼ねた予備授業が必要であると感じた。講義後、Nilayとも話をしたが、教員と学生の間でもお互いが理解することが必要で、何回か授業を行いつつ、上手く落としどころを探っていくことが大事であるという話を聞いた。私の講義に対しても、日本で日本語で行うよりも質問への答が返ってくる場所から、Nilayがこれまで培ってきた素地が生きていることが感じられた。

今回学んだことがそのままの形で大阪大学での講義に導入するのは難しいこともあるだろうが、今後は学生を授業に引き込み、アクティブなインタラクティブな授業とすべく、様々な手法を試し、よりよい講義スタイルを目指していきたい。

今回のFD研修は大学院GPの多大な支援のもと行かせて頂きました。このような機会を与えていただいたことに感謝致します。また、本プログラムに携わったCSUFスタッフ一同、松本玲子さん、プログラムの責任者である金谷茂則教授に厚く御礼申し上げます。